

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0642 ◆◆◆

21/06/30

## 【ここ数年、7月相場は「薄商い＝荒っぽい変動」に注意】

6月相場はあと一日、30日付の変動を残しているものの、週末に発表される経済指標、米雇用統計待ちといった色彩が強く、よほどのことでもない限り、このまま終了する見通しだ。

その場合、月間変動幅は前月とあわせ2ヵ月連続で2円にとどかないことになる。再三再四レポートしているように、ここ数年のドル/円相場は「1-4月までに年間変動の多くを達成、年末に向けた残りは惰性の展開をたどる」ーことが多いのだが、いみじくも今年もそんな経験則どおりの値動きをたどる危険性がジワリと現実味を増してきた気もしないではない。

### ◎「夏の米株高」も期待、その場合ドル高・円安有利だが……

7月相場について、まずは星取表を見てみると、1990年以降昨年までの31年間で17勝14敗となっている。勝率換算で、およそ55%とわずかにドル高有利ではあるものの、特徴といえるほどのものではないようだ。

そんな7月のドル/円相場を、別の観点から見た場合、ひとつ興味深い事象がうかがえる。それは参加者が徐々にサマーバカンス入りするため流動性が乏しくなることもあってか、過去の7月相場は「動かか動かないか比較的極端な値動きをたどることが多い」ーということだろう。

さらに2016年以降、比較的最近の相場だけを見ると、なかなかの変動をたどることも少なくなく、むしろ「小動き」とどまることの方が珍しい。たとえば、昨2020年の7月変動幅は3.97円で、これは年間3位の変動だった。翻ってみれば、前述したように今年は5月そして6月と2ヵ月連続で2円以下の小変動。したがって、月間変動幅が3円程度でも「なかなか大きな変動」と言えるだろう。そうした意味も含めて、7月相場は「薄商い＝荒っぽい変動」にも一応注意しておきたい。

一方、視点を為替ではなく株価、それも米株に移すと、「サマーラリー(夏の株高)」という言葉があるように、NYダウなどは夏場に上昇しやすいという傾向がある。そうした「夏の株高」の反動が秋に来ることが多いわけで、実際にブラックマンデーなど過去の暴落の多くが10月に集中、「悪魔の棲む10月」などと言われていることはよく知られているだろう。

ともかく、7月に「米株の上昇」が見込まれるのであれば、為替と株価の動きは連動することも少なくことから、本来は「ドル高・円安」に動いても不思議がない。ただし、今年については、周知のように早期の米テーパーリング観測が強く、それが米株高の足かせになるといった見方も取り沙汰されている。むしろ、イレギュラー的に「米金利高＝米株安」となる可能性も否定できず、その場合には為替市場は逆方向への動き、ドル安・円高が進行しかねないのかもしれない。

なお、最後にニュースの観点から過去の7月を見ると、「米国の通貨が『ドル』に決定(1785年)」をはじめ「リラ暴落でイタリア市場が一時閉鎖(1985年)」など、為替に関する興味深い事象が少なくないほか、「米国が英国からの独立を宣言(1776年)」や「ウォーターゲート事件でニクソン大統領の弾劾可決(1974年)」、「ロッキード事件で田中前首相逮捕(1976年)」など、歴史的に重要な出来事も相次いでいた。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるということではない。しかしながら、ここ数年の世界情勢を振り返ると前者はともかく後者については、何が起こっても不思議はないだろう。とくに、個人的に注視しているものが一年延期された東京オリンピックに関する事象だ。さらなる延長は見込みにくいものの、開催中止を含め、関連する何かのサプライズが聞かれてもおかしくはないように思っている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

